

悪魔の喉笛を見た！

——ガリューロス空港にて——

平日とあって、ガリューロス空港の待合室は、閑散としていた。クリチーバ行き他便が発する時刻が迫っているのに、出る気配がない。なにやらアナウンスがあるが、ポルトガル語らしく全然わからない。

「オイオイ、これはどうなってるんだ」と思いながら待合室を見渡すと、書類を読み込んでいる男がふと目を上げた。アララ、何とジャックではないか。

いやージャック、こりゃあ驚いた。イグアスの滝に行くのかい？

マサ！去年ヨハネスブルグで会って以来じゃないか。イグアスの滝に行くのか？
オレたちも同じ便だ。滝の近くのホテルに2日ほど泊まる予定さ。

ジャックは夫人同行である。

この年の4月、わたしは、国際ネットワークの年次総会出席のため、サンパウロに出張した。ブラジルは日本のちょうど反対側なので気候は逆。ロサンゼルス経由で23時間の長旅である。

フライトが毎日あるわけではなく、わたしも、会議の2日前にはサンパウロ入りするはめになった。

一人では暇を持てあます。せっかくだから、イグアスの滝を見に行こうと思い立った。サンパウロから、南西へ飛行機で約1時間。この巨大な瀑布は「神の賜」とも呼ばれ、世界の八大美観の1つである。

やっぱり弁護士だな、観光旅行にも契約書持参で、暇を見つけては仕事かい？

わたしが皮肉をいうと、ジャックは大真面目。

今度フランスでワールド・カップがあるだろう。その関係で商標のライセンス契約を検討しているんだ。事務所を1週間も留守にするんだから、観光中も仕事ぐ

らいはしなくちゃー。

そういえば、ジャックは、若い時はフランスのサッカー・チームのメンバーか、補欠だった筈だ……。『芸は身を助く』とはこの事で、恐らくそのツテで、弁護士に転身してから、サッカー関係の仕事をしているのだろう。

フライトは、結局、30分ほど遅れて出発。このくらいの遅れで、ジタバタするようでは、この国ではやっていけないらしい。騒ぐのはわれわれのような外国人だけである。（ちなみに、帰りの便もベタ遅れで夜遅くなり、ホテルに帰るタクシーも心配しなければならない有様だった。）

——シュラスコ料理を楽しむ——

クリチーバでは、ガイドのサイトウさんが出迎えてくれた。クリチーバはパラナ州の首都で、この地方にはドイツ人、イタリア人、ポーランド人の移民が多いという。広い並木通りや公園の多い町である。ここで、ジャック夫妻と別れ、わたしはサイトウさんの車に乗る。

彼は40代後半。10代に日本を出て、アメリカやブラジルを転々としてきた。現在は、日本からの観光客のガイドを主な仕事にしている。

空港から、イグアスの滝までは、車で約1時間。ジャングルとはいかなくても、辺境の山地にあるはずと思っていたが、林の中を切り開いた道は、きれいに舗装されている。これでは、八幡平の観光とさして違いはない。観光のために、辺境も奥地もアスファルトで覆ってしまうのは、がっかりである。

午後1時も過ぎたので、何はともあれ途中で腹ごしらえ。

わたしが『典型的なブラジル料理を食べたい』というと、サイトウさんが説明してくれる。

じゃあ、シュラスコにしますか？

元々はカウボーイが食べていた焼き肉料理なんですが、牛、豚、鶏、羊などの肉を炭火焼きにして、大きな串に刺したものを、ボーイがスライスして皿に盛ってくれます。

それともフェジョアーダがいいですか。日本人の観光客はゲテモノだといってあまり好まないんだが……。これは昔奴隷として連れて来られた黒人が、黒豆（フェジョン）を豚の耳、しっぽ、舌、皮とごった煮にしたのが始まりといわれています。元々はブラジルの郷土料理だったのが、ちょっとした高級料理になってしまったんですよ。

ゲテモノ料理なら望むところだが、炭火焼きの串刺しの方が面白そう。取り敢えず、今日のところは野趣豊かなシュラスコ料理に決定、サイトウさん旧知のレストランへと向かう。

観光客相手の小さなレストランなので、あまり期待しなかったが、味は結構いける。

コブ牛（クッピン）のコブや豚の固まりを時間をかけて炭火で焼く。それを大きな長い串に刺し、ボーイが串ごとテーブルに持って来る。食べたい肉を好きなだけ切ってもらえばよい。

コブ牛のコブは、肉は柔らかで脂身がほどよく、ジューシー。コブ牛といってもアルカトラ（太もも）や、ピッカニアなど部位によって味が違う。ピッカニアは尻の下30センチほどの部分の肉で、この部分が最も美味。

味つけはほとんど岩塩だけだが、これが微量元素でも含んでいるのか、普通の塩とは違って絶妙である。よけいな味付けはしていないので、素材の味そのままだが生きている。

こうして1時間ほど食事を楽しんだ後、滝に直行。

——滝の地響きが聞こえる——

平日のせいか、ほとんど行き交う車もない道を、サイトウさんはワゴン車をブンブンすっ飛ばす。このあたりはもう国立公園で、緑が次第に濃くなる。やがて、ホテル・ダス・カタラタスが左手に見える。このホテルは、居ながらにして滝の観光を楽しめるのが売り物。国立公園内の唯一のホテルである。ジャック夫妻もここに泊まる筈である。

滝はもうすぐ。滝の落下音が腹に響くような地響きで伝わってくる。「滝の流れる音は25キロ先からも聞こえるそうですね。」わたしが尋ねる。だが、サイトウさんの話では、これは全くの誇張。現地に来たこともない人が、ガイド・ブックに記事を書いてから、尾ひれがついたという。

イグアスの滝はアルゼンチンとの国境にある。サンタ・マリアの滝とも呼ばれる。ナイア

ガラ（北アメリカ）、ヴィクトリア（アフリカ）と並んで世界三大瀑布の1つだが、イグアスの滝が世界最大である。

幅4キロにわたって、80メートルの高さから275の小滝に分かれて流れ落ちる。流量は1秒当たり1800立法メートル。ナイアガラの滝でさえ落差はせいぜい50メートル、幅も1キロちょっとだから、イグアスの滝がいかに巨大かわかる。

最初は滝の上方にある展望台から、滝の全容を見る。通常なら1月から6月までの雨期には、滝は1つにまとまって落下するが、この2ヶ月は晴天続きで、通常の2分の1の水量という。それでも大瀑布は見る人を圧倒してやまない。

幅4キロにわたって大小の滝が落下する様は壮観である。滝の遙か下流にいる人が、まるでけし粒のように見える。

滝には、河床から離れず、急傾斜の河床を白い泡をたてて流下するものもあるが、イグアスの滝は、流水が河床を離れていっきに落下する。遙か下の滝壺では、流水が渦流となる。

——イグアスにかかる虹——

展望台で全容を見たあと、20分ほどかけて小径を下り、滝の中段に設けられたテラスにたどり着く。テラスから川の途中まで小さな橋がかかり、そこからイグアスの滝を遙かに見上げる。季節は日本とは全く逆だから、ここの4月は秋なのだろうが、この日はまるで夏のような暑い日。滝のしぶきが霧となって四散し、降りかかる。

ひととき大きな滝のてっぺんに、土地の人が「悪魔のノドブエ」と呼ぶ巨大な岩石が見える。年に何人か、この付近から身投げをする人がいる。確かに、この滝は人を吸い込む魔力をもっている。何ということない岩だが、あの岩壁から滝壺を望んだら、ひとたまりもないだろう。

ちょうど、橋に降りた時は、二重の虹が半円形をなして、巨大な滝にかかっていた。外側から内側にかけて赤橙、黄、青緑の色が、霧の中に幻想的に浮かび上がる。これが主虹。もう1つの副虹は、色の配列は主虹とは逆。主虹より一回り大きい、主虹より薄い。

サイトウさんが「虹を指差してはいけません」と笑いながらいう。「虹のタブー」をもつ民族は多い。虹を指差すと体が腐るとか（メキシコのチャムラ族）、虹を指差すとウナギのような魚の姿に変身して噛みつく（コロンビアのデサナ族）などの伝説があるそうであ

る。

中学生らしい女生徒数人が、虹に見とれて立ち止まっている。滝から舞い上がる大量のしぶき、美しい二重の虹、腹に響く滝の地響き、そして何よりもその圧倒的な存在感。神秘的な大自然の業（ワザ）に接し、わたしは、しばし頭も空っぽになり、ただずっと見続けた。サイトウさんに促されなければ、いつまでも見続けていただろう。

見上げると、高く澄んだ蒼空にコンドルが数羽、滝の上をゆっくりと舞っている。ふと夢想した。ハングライダーで、イグアスの滝の上空をのんびりと飛んでみたいものだ。（6分刻みで働く）時間報酬制などという、非人間的なリーガル・ビジネスにどっぷり浸って20余年。都会生活を逃れ、のんびりと辺境で数年を過ごすのも悪くない。もちろん見果てぬ夢のまた夢だが…。